

龍村 仁 監督作品

地球交響曲 第八番

私達日本人の身体の中には遥か縄文の昔から1万年近くに渡って聴き続けて来た樹の精霊の歌声が、かすかな残響波となって今も響き続けています。

世界の人々が称賛する日本の伝統文化の美は樹の精霊との出会いによって生まれ、洗練されて来た、と言えるでしょう。

東日本大震災から4年、人智を遥かに越えた宇宙的な力に依ってもたらされた崩壊と苦難から立ち直り、真の復活を遂げる為に、私達日本人は今、何に気づき、何を成さなければならぬのか。

「樹の精霊の声、すなわち宇宙の声を聴く力を甦えさせなければならない」と気づいた日本人たちがいます。

「地球交響曲第八番」では、この人々の想いと活動を世界に向けて発信します。

地球の未来の全ての生命が健やかに、未永く生き続けることを願って。

龍村

樹の精霊に 出会う



梅若玄祥
能楽師・人間国宝



見市泰男
能面打



柿坂神酒之祐
天河大辨財天社宮司

奈良県吉野にある天河大辨財天社の宝物庫に600年間眠り続けてきた能面「阿古父尉」を訪れた復活の時。観世流能楽師三代目元雅によって奉納された能面の写しが現世に蘇り、演者に乗移った“宇宙の意志”は、時空を越えた幽玄の世界へ人々を誘ってゆく。

樹の精霊の 声を聴く



中澤宗幸
ヴァイオリン製作者



中澤きみ子
ヴァイオリニスト

「ストラディヴァリウスは単なる楽器ではない、魂を宿した有機体・すなわち生き物。魂＝樹の精霊は、歴代の名演奏家達が奏でた首魂を記憶し続けている。」と語る中澤宗幸は、東日本大震災の津波で流された楓や松を用いて「津波ヴァイオリン」を製作。ヴァイオリンの響きが奏でる“樹の精霊の声”に耳を傾ける。



畠山重篤
カキ養殖業
NPO「森は海の恋人」理事長



畠山 信
三男
NPO「森は海の恋人」副理事長

心に樹を植える

海の汚れの原因が森の荒廃にあると気付いた畠山重篤は植林運動を展開。気仙沼の海は青さを取り戻していたが、津波によりカキは全滅。4年に一度の室根神社の大祭で大役を担った彼の“魂”の復活と“海”の復活を描く。

たとえば霧が、森の滴となって地を潤し音をはぐくむように

森は営々と静かな繰り返しの中にある。

幾万年もこの営みの中で、人々は全てのものと繋がって暮らしていた。

しかも、これはさして遠い記憶ではない。

コンクリートに象徴される近代化の精神が、遠ざけていたに過ぎない。だから、

心の拠り所はいつもそこにある。

それ故にこそ、今どき、力を誇示する「城」の必要がないのと同様に、

コンクリートの城の役わりも、もう終えたのだと思う。

叶うならば、木で造られたお城が元の役わりを変え、十年・百年の時を刻み続け、

しだいに枯れてゆく時の表われを、ただ眺めていたい。

腕時計に決められる時間とは別の、いのちが刻む時間を感じていたいからだ。

そんな木の移ろいを、時計塔のようにあちこちから毎日眺めることのできる街。

それが、森から離れてしまった小田原にも取り戻せる、落ち着きなだろう。

新しい時代の、そんなシンボルが今は欲しい。

そこから木霊のように響きあう、多様な交響の音が聴こえてくる気がするからだ。

みんなでお城をつくる会